法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

テムズ・パスに設置されているゲートやスタイルなど

Ishikawa, Ikuji / 石川, 郁二

(出版者 / Publisher)
法政大学多摩論集編集委員会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学多摩論集 / 法政大学多摩論集
(巻 / Volume)
29
(開始ページ / Start Page)
37
(終了ページ / End Page)
66
(発行年 / Year)
2014-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00009600

法政大学「多摩論集」第29号
2013年3月

テムズ・パスに設置されている ゲートやスタイルなど

石　川　郁　二

テムズ・パスに設置されている
ゲートやスタイルなど

石　川　郁　二

Ⅰ．はじめに

テムズ川沿いにあるThames Pathを歩いていると牧草地が多い。イギリスのロンドンから列車に乗り、郊外に向かうと、しばらくして牧草地が見えてくる。それは日本の東京駅から郊外に向かう電車に乗っていては経験できないものである。

Thames Pathをロンドンの都市部から上流へと歩いて行くと、建物が林立している都市部を外れ、住宅地へと到り、その住宅地のはずれ辺りから牧草地が現われ、田園地帯へとつながっていく。

牧草地の中を歩く、と言っても、当然のことながら、牧草地の真ん中を歩くのではなく、牧草地の端を歩いたり、牧草地のテムズ川沿いを歩くことになる。その牧草地には羊が草を食んでいたり（写真１）、馬や牛が放牧されていたりする（写真２、写真３）。

写真１

写真２

写真３

さらに上流に行くと、牧草地だけではなく、畑も多くなってくる。

放牧されている家畜が、一つの牧草地から次の牧草地に移動できないようなゲートが Thames Path 上には設置されている。それらの中にはキッシング・ゲートやスタイルなどがあり、それらの種類もさまざまである。

さらに、住宅地に囲まれた細道には、小さなゲートが設置されているところがある。公道というよりも、地主たちが私有地の一部を Thames Path に提供しているような細道である。

そのような Thames Path 上に設置されているさまざまな設置物を調べてみる。

Ⅱ．１枚扉のゲート（Gate）

Thames Path を歩いていて、設置されているゲートの前まで来ると、これから牧草地の中、または住宅街の私有地の中を歩く、という少し緊張した気分になる。

昔は多くの家畜が放牧されている牧草地があちらこちらにあったのではないかと思われるが、現在では、よほど上流のほうに行かないと牧草地にいる家畜には出会えない。イギリスでも都市化が進み、住宅が郊外に延びている。公園になっていたり、動物のいない牧草地も多く目についた。

１）木製のゲート

Thames Path 上にあるゲートでは、観音開きになっているゲートは目につかなかった。１枚の扉で、その扉が開くゲートである。

このゲートは、木材でできているものと金属でできているものがある。

写真４は木製のゲートである。左側にテムズ川が流れている。写真の中央には Thames Path があり、右側には牧草地が広がっている。その Thames Path と牧草地の間に、鉄線が６本張り巡らされており、Thames Path のウォーカーが牧草地に進入できないようになっている。木製のゲートは、ゲートの強度を保つために、２本の材木がクロスして使われている。このゲートは右側が手前に開くようになっている。

写真５は牧草地と牧草地の間に設置されているゲートである。テムズ川沿いに

写真４

写真５

写真６

写真７

牧草地はあるのだが、Thames Path 自体はテムズ川から少し離れている。右の門柱の上に付いている丸い形のものは、Thames Path を表している標識である。ゲートの形が先ほどの写真４と似ているが、横棒は４本で、斜めにかけられている材木は１本である。

写真６は、写真５のゲートより幅が狭い。牧草地と牧草地の間に狭い小川がある。大きい動物だと飛んで渡ってしまうくらいの川幅である。それで、ゲートの左右には有刺鉄線が設置されている。

この橋は主に Thames Path を歩くウォーカー用に設置されている。材木が横木として５本使用されている。上から２本目には、写真では読みづらいが、「PLEASE CLOSE」と黄色い文字で書かれている。「閉めてください」という意味である。明らかに Thames Path を歩いている人に言っているのである。この土地の所有者がこのゲートを設置したのである。

写真７は、先ほどの写真６のものより幅の広いゲートである。このゲートは橋の一方の端に設置されている。下を流れる小川は、先ほどの写真６の小川より幅

が広いため、家畜が小川を飛び越える心配はない。そのため、ゲートの左右に有刺鉄線はない。ウォーカーが橋から落ちないように欄干が作られている。右側の欄干の一番手前に、Thames Path を表わしている丸い標識がここにも付いている。右側を流れているのがテムズ川である。

２）金属製のゲート

金属でできているゲートにはどのようなものがあるのだろうか。

金属製のゲートも、だいたい木製のゲートと同じような形が多く、金属製のゲートも観音開きのものは Thames Path にはなかった。

写真８は橋の一方の端についているゲートである。右側に、扉を固定する道具の留め具が付いている。左側には蝶つがいがあり、扉のテムズ川側が開閉できるようになっている。横に渡してある金属棒は５本あり、下の３本には動物が通ることができないように網の目状に細い金属棒が付けられている。この網の目状のものは、家畜が移動できないように付けられているだけではなく、これがあるこ

写真８

写真９

写真１０

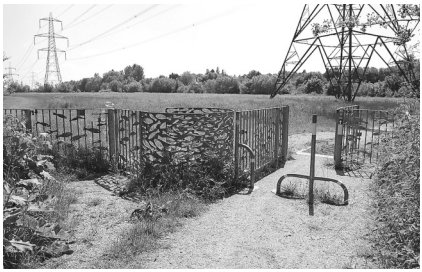

写真１１

とにより、金属製扉自体の強度も増すことになるのだ。

写真９は橋の上に設置されているものではない。歩いてできている小道が写真でよく分かる。やはり金属の横棒は５本あり、下の３本には網の目状の細い金属棒が付けられている。左側の柵には丸太が使われている。

写真１０は、金属の横棒の、下から４本に、格子状の細い金属棒がかけられている。ゲートの左右には鉄線がこれも格子状になっており、一番上には有刺鉄線が張られている。これだけ頑丈に鉄線が張り巡らされているということは、放牧している動物が移動できないように、かなり注意しているのである。

格子状ではなく、縦にだけ金属棒が入っているのが写真１１である。このゲートの扉と金属製の柵には魚の模様が付いている。この金属製の魚の模様は、縦の金属棒２本または３本に接している。そのため、見た目の楽しさだけではなく、柵の強度自体にも関係しているのである。このような模様のあるゲートの扉や柵は、他にはほとんど見かけなかった。珍しいものである。

写真１２と写真１３は、Thames Path のこの区間のそれぞれの端に設置されて

写真１２

写真１３

写真１４

写真１５

いるもので、ゲートの扉が斜めに作られている。このようなゲートも珍しい。一方にコンクリート製の低い塀があり、もう一方には幅の狭い鉄製の柵がある。その幅の狭い鉄製の柵は、格子状に鉄線をかけてある金属線の塀に接している。コンクリート製の低い塀と鉄製の柵をうまく利用したのであろう。コンクリート製の低い塀を見ても分かるのだが、地面が少し傾斜している。そのため、傾斜の上のほうの鉄線の柵に合わせてゲートの扉を作ると、扉を閉めた時、扉の下が空き過ぎる。そうなると、そこを通ることができる動物もいるだろう。逆に、傾斜の下のほうのコンクリート製の塀に合わせてゲートの扉を作ると、扉が閉まらなくなってしまう。それで扉の鉄製の横棒自体を斜めに作ってある。横棒は６本で、２本の鉄製の細い板状の棒をクロスして強度を保っている。

写真１４は幅の狭いゲートである。一人が通るのがやっと、という幅で、片側が生垣、もう一方は、幅の狭い鉄製の柵があり、その横に木製の柵がある。住宅があり、Thames Path のために広いスペースをとれなかったのである。その影響でゲートも幅が狭くなっている。

写真１５は、写真１４のゲートに比べてかなり幅の広いものである。農作業の車の出入りができるようになっているのだ。Thames Path を歩いているウォーカーたちは、この幅の広い１枚扉のゲートは使っていない。その左横の扉の付いていないゲートを通過して、歩いている人が多いようだ。人が通った跡ができているので、それが分かる。この扉のないゲートの下に、ぶ厚い材木が２本横に置かれている。これは家畜の通過を防ぐためのものだ。

３）ゲートの留め具

上に述べたゲートの扉が、少し押しただけで開いてしまっては、家畜が移動してしまう。そのために、扉には錠が付いている。ただし、鍵をかけてしまっては、ウォーカーも通れなくなってしまうため、扉を押してもすぐに扉が開かない程度の留め具が付いているのである。

写真１６はよく見かける留め具である。同じ種類の留め具を大きく写したものが写真１７である。丸い鉄製の棒を横に動かす、つまり、この写真の場合は左方向に動かすと、留め具が外れるようになっている。これは簡単な留め具である。

写真１８は、写真１７の手で持つ丸い鉄の棒が、途中で横になっている。横に

写真１６

写真１７

写真１８

写真１９

動かして留め金から外すのは同じである。構造自体は簡単なものだ。

写真１９は、扉と接している材木に掘ってある穴に鉄製の丸い棒が入り、扉を固定するようになっている。縦になっている鉄製の短い丸い棒を手で上にあげて、引っかかっているものを外し、鉄棒を左方向に引くと、扉と接している材木の穴から、丸い鉄棒が出て外され、扉が開くようになっている。ただし、ここのゲートは穴が穴になっていない。扉を手前に引けば、鉄製の丸棒が、穴のあいている材木から外れてしまい、扉が開く。だから、実質的には、縦になっている短い丸い鉄棒を横に引く必要がない。

横に引いて穴に入れるやり方の錠に写真２０がある。この金属の短い棒を横に引いて扉を開閉するのである。左の小さな板状のものを上にあげ、丸く突き出ている輪っかに手をかけて、横に引くのである。

同じような形式だが、扉に接している材木に穴があいているのではなく、金具が付いているのが写真２１である。扉側の留め具には、平べったい板状の金属棒を使用している。

写真２０

写真２１

写真２２

写真２３

板状の金属棒がもっと短いものが写真２２である。湾曲している箇所に手をやって引くのである。

最も簡単なものは、扉に付いている金属の輪っかを、扉のすぐ横に立ててある金属棒に引っかけるだけのものである。写真２３は扉自体も単純で、金属棒だけでできている。このゲートは家畜の移動というよりも、明らかにThames Path を歩いている人に、私有地だという注意を喚起させるものである。

もう少し複雑な留め具は写真２４のものである。この写真２４のゲートと一対になっているゲート、つまり、Thames Path のこの区間のもう一方の端のゲートなのが、写真２５である。ほとんどのゲートは入っていくと当然出るゲートがある。そのような両方のゲートと留め具は同じ種類のものが使われているのがほとんどである。この留め具は、上にある小さな丸いものを手前に引くと錠が外れるようになっている。

この小さな丸いものは同じだが、扉側に付いているものが板状で、横になっているものが写真２６である。

写真２４

写真２５

写真２６

写真２７

上述した丸いものを長く棒状にしたものが、写真２７である。上にある丸いものが小さい写真２５や写真２６のものより、この写真２７のように棒状に長くなっているもののほうが、利用する人にとっては使いやすい。構造は同じで、この長い金属棒を手前に引くと留め金が外れるようになっている。

４）ブライドル・パス（Bridle Path）のゲートの留め具

ブライドル・パスとは乗馬用の道のことである。*OED* によると、「乗馬用で自動車用ではない小道」となっており、*Longman Dictionary of the English Language* によると「乗馬に適した小道あるいは優先権がある道」となっている。

Thames Path にブライドル・パスがなぜ存在しているかというと、昔はテムズ川を行き来する荷物を運ぶ船を、馬が引っ張っていたのである。上流に向かう船を馬に引っ張らせていたのだ。現在ではもうそんな姿は見られない。

Thames Path を歩いていて、ほとんどの区間がテムズ川沿いに木が植わっているのが分かる。ただし、一部の区間では、牧草地がテムズ川の岸辺まで迫ってお

り、船をけん引するロープの邪魔になる樹木がない箇所はあるが、ほとんどの河岸では、馬に引っ張らすのは無理であるし、現在ではその必要もない。

そのブライドル・パスの一部が Thames Path になったのである。だから、ブライドル・パスと Thames Path が同じ小道を使っている場合があるし、別の道になって分かれている場合もある。同じ道を共同で使用している場合は、現在では当然のことながらウォーカーが優先である。

イギリス南西部のコッツウォールド丘陵にある村の中を横切っている Thames Path を歩いている時、乗馬を楽しんでいる人たちを見かけた。村道を数頭の馬が歩いていた。そのようなブライドル・パスは田園地方では今なお健在である。

乗馬をやっている人たちは、ゲートに来たからといって、いちいち馬から降りてゲートの留め金を外すわけにはいかない。

写真２８で分かるように、留め金を外すために手で持つところが高くなっており、馬に乗っていても持つことができるようになっている。この扉より上に出ている逆U字形になっているところを横に引くと錠が外れる。

写真２８

写真２９

写真３０

写真３１

写真３２

乗馬用の取っ手はもう１種類あった。写真２９のように、手で持つところが逆Ｕ字形になっていなく、まっすぐに上に延びているものである。これも逆Ｕ字形と同じように横に引いて留め金を外す構造である。

Thames Path に設置されている乗馬用の取っ手があるゲートは、牧場への入口に設置されているものが多い。

牧場の近くではないが、写真３０のように、Thames Path とブライドル・パスが同じところを使用している道に設置されているゲートに、乗馬用ゲートの留め具の取ってが取り付けられていた。

テムズ川には、ロック（Lock）と呼ばれる閘門（こうもん）（写真３１）があちこちに設置されている。閘門とは「船舶を高低差の大きな水面で昇降させる装置。二つの水門の間に、船を入れる閘室を持つ。船を閘室内に入れたのち水門を閉じ、閘室内の水位を昇降させて出て行く側の水位と同じにしてから船を進める」（『広辞苑（第五版）』岩波書店）というものである。そのロックへの出入り口に、乗馬用の取っ手が付いている扉のゲートがあった。写真３２はハンブルデン・ロック（Hambleden Lock）の出入り口の Thames Path に設置されているゲートの乗馬用逆Ｕ字形取っ手のついた留め具である。

Ⅲ．キッスィング・ゲート（Kissing Gate）

キッスィング・ゲートとは、辞典によると「（一度に一人しか通れない）小さな自在門《生垣や柵に設けられるＵ［Ｖ］字形の入口をもつ木戸》」（『新英和大辞典（第六版）』研究社）となっている。

このキッスィング・ゲートも家畜が移動できないように設置されているもので、一度に一人しか通過できない木戸である。恋人たちはしばしの間離れなくてはならず、このゲートのこちら側と向こう側でお互いに立ち止まり、キスをするとこ

ろからキッスィング・ゲートという名前が付いたと、テムズ川上流の Thames Path を一緒に歩いたアラン（Alan）さんというイギリス人から聞いた。

辞典で kissing gate を調べても、なかなか分かりづらいし、イメージできない。さまざまなキッスィング・ゲートを写真で見てみよう。

１）木製のキッスィング・ゲート

写真３３と写真３４は同じキッスィング・ゲートである。写真３３はキッスィング・ゲート内の扉が向こう側になっている。通行人はこちら側からゲート内に入り、左のＵ字形の囲いの中にいて、写真３４のように扉を横へ引く、つまり、写真では手前側に引くと、Ｕ字形の囲いの中にいる人は向こう側に出られる、という構造である。

Ｕ字形の囲いの中にいて扉を横に引く、ということが牛馬や羊にはできないであろう。もし家畜がキッスィング・ゲートまで来たとしても、写真３３の左のＵ字形の囲いの中に入ってしまい、身動きがとれず、元へ戻ってくるしかないのである。

写真３３

写真３４

写真３５

写真３６

写真３５と写真３６は同じキッスィング・ゲートで、テムズ川沿いにある。U字形の囲いの中が先ほどの写真３３よりも少し狭い。そして写真３６のキッスィング・ゲートの扉に接する縦になった角材に付いている蝶つがいの位置を見てみると、写真３３の扉の蝶つがいが付いている位置より、少し下に付いている。そして、U字形の囲いの中の地面が少し上がっていることもあって、写真３６のように、扉が土に接触し、U字形の囲いの真ん中で止まってしまっている。このような場合は扉を持ち上げるようにして移動させなければならない。

U字形の囲いの幅と奥行きが少し広いキッスィング・ゲートが写真３７である。この場合はウォーカーにとって、キッスィング・ゲートを通過するのが楽であるが、自転車も通過できるのである。

歩いている時、サイクリングをやっている若者が、このキッスィング・ゲートにやってきた。どうするのか、と思って見ていると、彼はサイクリング車の前輪を上に持ち上げた。つまり、自転車を縦に立たせて後輪は地面につけたままで、キッスィング・ゲートのU字形の囲いの中に入り、扉を横に移動させて、難なく

写真３７

写真３８

写真３９

写真４０

写真４１

キッスィング・ゲートの向こう側に出て行ったのである。

写真３８は、U字形の囲いの幅と奥行きが狭いキッスィング・ゲートである。これでは一人ずつしかゲートを通過できない。

写真３９はキッスィング・ゲートに入る時と出る時が、今までのキッスィング・ゲートのように、Thames Path が一直線になっていない例である。こちら側からキッスィング・ゲートに入り、U字形の囲いの中に入って扉を横に引き、出ていく時に、そのまま真っすぐ前に出ていくことになる。つまり、この写真３９では、キッスィング・ゲートへの進入とは９０度右に出ていくことになる。そして、キッスィング・ゲートを出ると、すぐに Thames Path は、こんどは左に９０度曲がっているので、進入時と平行にはなるのだが、一直線上にはなっていない。キッスィング・ゲートに鎖が付いているのも珍しい。

ここまで見てきたキッスィング・ゲートは、人が中に入る囲いがU字形であった。U字形の囲いのキッスィング・ゲートが多いのだが、囲いがV字形のものもある。それが写真４０である。V字形のキッスィング・ゲートは囲いの中に一人しか入れず、幅と奥行きの狭い写真３８のU字形の囲いのキッスィング・ゲートと同じように、一人ずつしか通過できない。背中に少し大きな荷物を背負っている時には、V字形の囲いの中で身動きができない時もある。

写真４１は自動車道路のこちらから写真を撮ったもので、小さく写っており、見づらいかもしれないが、V字形のキッスィング・ゲートである。このキッスィング・ゲートは木製であるが、右側には金属製扉のゲートが設置されている。この金属製ゲートは幅が広い。この幅の広い金属製ゲートは農機具や自動車の通過用である。人間は狭いV字形キッスィング・ゲートを通るのである。

２）金属製のキッスィング・ゲート

金属製のキッスィング・ゲートはほとんどすべてがU字形か丸形であった。

写真４２はU字形のキッスィング・ゲートで、扉には横に５本の金属棒がある。

写真４２

写真４３

写真４４

写真４５

斜めに１本、金属棒を付けて補強してあるが、扉を動かすとヒラヒラとしなるような感じがして、扉の面の強度が弱いようだ。このキッスィング・ゲートは一度に一人しか通過できない。

しかし、U字形の囲いの奥行がある写真４３は複数の人が入ることができる。これでは、なぜキッスィング・ゲートと呼ばれることになったのかという理由を考えれば、もはやキッスィング・ゲートとは言えないかもしれない。写真４２は牧草地の中に設置されており、ウォーカーだけのためにある。しかし、写真４３のキッスィング・ゲートは、キッスィング・ゲートの向こう側にベンチが何脚も設置されているのが写真に写っている。公園か、近くの人たちの憩いの場所になっているようである。つまり、写真４３はThames Pathを歩くウォーカーだけではなく、近くに住む人たちが散策や散歩のために、家族で利用したり、複数の知人で利用したりするのであろう。だから、キッスィング・ゲートのU字形の囲いも、複数の人が一度に利用できるようになっているのではないだろうか。扉の金属の横棒は写真４２と同じ５本だが、下の３本は縦の金属棒で補強されている。

金属の棒も丸い棒が使われており、写真４２のキッスィング・ゲートよりも強度があるように思われる。

Ｕ字形の囲いの中が狭いキッスィング・ゲートは写真４４である。このキッスィング・ゲートは住宅と住宅の間を通っている Thames Path に設置されているものであり、ここまで見てきたキッスィング・ゲートとは趣が違う。金属の棒を縦に使い、どこかの館の庭園に通じているような感じを与える。

丸形のキッスィング・ゲートは写真４５である。囲いの部分が丸くなっている。金属の扉の下には、網の目状になっている金属棒が付いている。この丸形のキッスィング・ゲートの扉には留め具が付いているものが多い。丸形の囲いの片方の端ともう一方の端の幅が大きいので、羊などが扉を押してゲートの囲いの中に入ってしまう場合がある。その場合に、扉が中途半端に真ん中あたりで止まってしまうと、そのまま反対側に出ていける可能性がある。囲いが丸形で、囲いの中の空間が大きいために留め具を付けている。そして、Ｕ字形やＶ字形のキッスィング・ゲートのように、扉の一部が囲いの柵と重なり合い、扉が止まるのではない。

写真４６

写真４７

写真４８

１枚扉のゲートのようになっており、その横に丸形の囲いが設置されていると考えられないこともない。写真４６を見ればそのことがよく分かる。大きい丸形の金属製キッスィング・ゲートにはほとんど留め具が付いており、U字形やV字形の木製キッスィング・ゲートとは、構造上、少し違うのである。

写真４７は、幅の広い１枚扉のゲートの横に設置されている金属製のキッスィング・ゲートである。１枚扉のゲートは農機具や自動車の出入り、または家畜を移動させるために使用され、ウォーカーはこのキッスィング・ゲートを使用する。このように丸形の囲い内の空間が大きい場合は、一人ずつではなくとも２人一緒に入ることができるため、恋人たちは離ればなれにならなくてもすむであろう。

囲いや扉などの金属棒が縦になっているのが写真４８である。このキッスィング・ゲートには留め具が付いていない。つまり、扉は丸形の囲いの内側で止まるのである。丸形の金属製キッスィング・ゲートだが、上に述べたキッスィング・ゲートより、囲いの中が狭い。このキッスィング・ゲートは、金属製の１枚扉のゲートの横に付いており、ここでは両方とも使用されているようだ。

Ⅳ．スタイル（Stile）

スタイルとは「踏み段」のことである。研究社の『新英和大辞典（第六版）』によると「踏越し段《牧場などの柵や塀などに、人は乗り越えられるが家畜は通さないために設けた階段》」となっている。踏み段を上がり柵を乗り越えて反対側に出るのである。

Thames Path に設置されているスタイルは１段のものと２段のものがある。構造は簡単なもので、単に踏み段の数ということなら、写真は２枚あれば足りる。しかし、スタイルの形や、そのスタイルの設置方法にいろいろな種類がある。

１）１段のスタイル

まず１段のスタイルを見ていこう。

写真４９は橋の出入り口、つまり、橋の端にあるスタイルである。家畜が橋を渡ることができないように、木材の板が３枚、横向きに留めてある。ウォーカー

写真４９

写真５０

写真５１

写真５２

写真５３

写真５４

はそれを越えなければ橋には入れない。そのために、スタイルが設置されている。橋の上から撮ったものが写真５０である。ウォーカーは一人ずつスタイルに乗って、向こう側に乗り越えていく。

幅の広い１枚扉のゲートの横に設置されているスタイルもある。写真５１は簡単な作りのスタイルである。スタイルの板が柵と直角に置いてある。金属製の１枚扉のゲートを開ける手間を省いているのである。

写真５２も金属製のゲートの横に設置されているが、１枚扉のゲートは写真５１よりも幅が狭いものである。柵は鉄線で作られている。柵を乗り越えやすいように１本の材木が、格子状の鉄線の柵の上に、横に使われている。この柵は鉄線が格子状に張られている構造なので、材木がないと、柵を越える時に格子状の鉄線を壊す恐れがある。そのために、材木を使って、安全に越えられるようにしたのである。

写真５３は丸形の金属製キッスィング・ゲートの横にスタイルの付いた柵がある。どちらか一つが設置されていればよいはずだが、なぜだかキッスィング・ゲートと一緒に設置されている。

見た目もシンプルなものが写真５４である。小柄な人なら、丸い金属棒で囲まれた中をくぐれば通過できそうであるが、イギリス人にとっては身を屈むのはきついのかもしれない。

１）２段のスタイル

２段のスタイルには２種類ある。板がクロスしているスタイルと、平行になっているスタイルである。

写真５５は２枚の板がクロスしているスタイルである。柵のこちら側と向こう側が同じ高さの場合は、このような形で２枚の板が中央でクロスしている。

写真５６も２枚の板がクロスしているスタイルであるが、柵を乗り越えた向こう側が自動車の通行できる道路なので、先ほどの写真５５とは異なるところがある。写真５５は２枚の板が、両方の板の真ん中でクロスしているが、写真５６は道路側とは反対側のこちら側に、２枚の板のクロスしている中心がある。自動車

写真５５

写真５６

写真５７

写真５８

写真５９

道路の端を通行する人や自転車の邪魔にならないようになっており、自動車道路側に板をあまりはみ出してはいない。そして、自動車道路側とこちら側とでは地面に高低差があるため、このスタイルは、こちら側では２段のスタイルになっているが、向こうの自動車道路側では１段のスタイルである。

２枚の板が平行で階段状になっているスタイルが写真５７である。どちら側からでも越えやすいように、スタイルの板の真ん中に柵がくるように設置されている。

写真５８は金属棒の柵を乗り越えるために設置されているスタイルだ。このスタイルがなければ、ウォーカーは金属棒に足をかけて乗り越えてしまうであろう。

写真５９は２段になったスタイルだが、橋の入口の地面が狭いのと、地面が右側に下がっておりテムズ川の水位が少し上昇しただけで、通行できなくなる恐れがある。そのため、１段目と２段目の板がＴ字形になっており、左側の高い地面の方からスタイルの板に上るようになっている。板が狭いと上りづらいので、何枚かの板が使われている。

３）扉なし一人用Ｖ字形ゲート

家畜が自由に通過するのを防ぐために、Thames Path 上に１枚扉のゲートやキッスィング・ゲートは設置されているが、扉がないもので家畜が自由に通過するのを防ぐものがほかにもある。これは本当に一人ずつしか通過できない。それを「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」と言うことにする。

この「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」にも、木製のものと金属製のものがある。木製の「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」の多くのものは橋の入口に設置されている。それも幅の狭い橋である。

写真６０は小川に渡してある橋に設置されている「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」である。橋といっても簡単な作りの橋で、２本の長い角材に厚い板を横向きに打ちつけ、手すり用に金属のパイプを取りつけてあるだけのものだ。「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」が地面よりも１段高くなっているので、上がり段があり、その段はスタイルと言えないこともない。「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」の内側から撮ったものが写真６１である。

写真６０

写真６１

写真６２

写真６３

写真６２は橋の形が少し湾曲し、橋の真ん中が高くなっている。橋の端のコンクリートの土台以外はすべて木製で、手すりも木材である。写真６３で分かるように、テムズ川が氾濫しても、橋自体は水の中に没することがないように、橋の端のコンクリート土台が高くなっている。高くなっているため、「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」の前に階段が２段ある。この「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」の前の階段もスタイルの一種と言えなくもない。

写真６４は明らかにスタイルと言える踏み段があるものだ。これも簡単な構造の橋の入口に設置されていた「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」である。

写真６５は金属製扉のゲートの横に設置されていた「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」である。左にある１枚扉のゲートには小さな車輪が付いている。ゲートを動かす時に動かしやすいように車輪があるということは、ゲート自体が重いので、開けると扉が傾くのであろう。ウォーカーには女性もいるので、女性のウォーカーが一人で動かすのは大変である。それとウォーカーが１枚扉のゲートを常時動かしていると、ゲート自体が壊れやすくなるのだろう。

写真６４

写真６５

写真６６

写真６７

金属製の「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」がある。写真６６も金属製１枚扉のゲートの横に設置されているものだ。乗り越える時に足を置くところは少しあるが、それはスタイルとは言えない。このような金属製のものはあまり多くはない。

「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」ではなく「扉なし一人用逆Ｖ字形ゲート」というか「扉なし一人用ハの字形ゲート」といえるものが写真６７である。これは、今までに掲載した「扉なし一人用Ｖ字形ゲート」のように、ゲートを跨いで向こう側に越えるというものとは違う。一人一人通過せざるを得ない、ということは同じなのだが、この写真６７の場合には、自転車やベビーカーなども通過できるようになっている。この地点では、ベビーカーを押して散歩している人を見かけた。その場所に適したものが設置されているのが分かるのである。

Ｖ．その他のゲートや設置物

今までに述べたゲートやキッスィング・ゲートとは少し違うものがある。家畜の移動を防ぐために設置されているもので自動車は通行できるものや、自転車などが速い速度で走るのを防ぐために置いてあるものである。

１）その他のゲート

写真６８の木製のゲートは、単なるゲートの横に、キッスィング・ゲートのＵ字形の囲いをあとから設置し、ゲートの扉に新たに幅の狭い扉を付け足したものである。

写真６９は固定のゲートで、金属でできているコの字形とＴ字形の柵が設置されている。ウォーカーは横に並んでこのゲートを通過することはできないが、縦に並べば複数の人でも一緒に通過できる。キッスィング・ゲートのように、２人が一度離ればなれになる必要はない。この写真６９は家畜の移動を防ぐためというよりも、Thames Path を走っている自転車の速度を止めるために設置されているようである。サイクリングをやっている人は、ここで一度、自転車から降りなければならない。

写真７０は、両側に塀のある小道に設置されているものだ。この小道には自転

写真６８

写真６９

写真７０

写真７１

車のマークがある。自転車通行可で、歩行者だけではなく、サイクリングをやっている人もこの小道を使ってよい。しかし、スピードを出してこの小道に入って来られないように、鉄パイプで柵が作られている。

写真７１も、ウォーカーとサイクリングをしている人の両方が利用できる。手前の角材の上に、黄色い Thames Path のマークと、その下に自転車と歩行者の両方が通行できると言うマークがある。自転車と歩行者の表示の下に書いてある英語は「Pedestrian Priority」とあり、「歩行者優先」である。

この写真７１の道は自動車も通れるようになっている。手前から２列目にある横に長いゲートは開閉できる。これは Thames Path を整備するトラックなどが通行できるようになっているのである。

テムズ川で開催されるオックスフォート大学とケンブリッジ大学のボートレースを見に行った時、テムズ川沿いの Thames Path を白バイ、と言っても、白ではなく青だったが、警察のオートバイが Thames Path をゆっくりと移動し、警備していた。当時はテロが多い年だったため、警備を強化していたのだ。もちろん、

写真７２

写真７３

写真７４

写真７５

その区間の Thames Path はパトカーでも通行できるだけの幅があった。

牧草地とテムズ川の間に作られている Thames Path が写真７２である。この写真は左側から、テムズ川、Thames Path、そして牧草地と写っているので、とてもわかりやすい。右側の牧草地には鉄線で入れないようになっている。写真４には扉のあるゲートがあったが、この写真７２には扉がない。扉のないゲートということは、家畜の移動を心配する必要がないということである。そして、ウォーカーだけではなく、サイクリングを楽しむ人たちも通行できるのである。

「扉のないゲート」とは言えないようなものが写真７３の中に写っており、１枚扉のゲートと石組みの壁の間に設置されている。１枚扉は横の鉄パイプに鎖で縛られているために開けることができない状態だ。現在では、牧草地の家畜の移動とか、自動車の通行というものがほとんどないのであろう。１枚扉のゲートの横に板状のコンクリートが２本、横に置かれている。そこに扉はない。Thames Path を走っている自転車をいったん停止させるために、そのまま置かれているようである。

このような「扉のないゲート」では、前に出した写真１５にそのゲートがある。写真１５の左側に写っている扉の付いていないゲートは、下に大きな材木が横に置かれていた。家畜はこのぶ厚い材木をまたいで通過しなければならず、それも２本置かれているために、通過しづらいのである。

ロックの出入り口にあるゲートの中には、扉が鉄棒の留め具で地面に固定できるものがある。写真７４のゲートでは、歩いている人はこの写真の状態で通行できる。そして、ロックへ荷物を運搬する自動車などのためには、鉄棒を上に上げれば、このゲートを開けることができるようになっている。ここに書かれている掲示の英語は「Notice No cycling past this point」（「警告　サイクリングでこの場所は通過できない」）となっており、自転車に乗ったまま進入はできないのだ。

写真７５も同じくロックの出入り口にあるゲートである。ここの英語の掲示には「Notice Please Dismount and walk through lock」（「警告　自転車などは降りて、歩いてロックを通過してください」）とあり、自転車に乗っている人は、自転車を降りて押していけばロックに入ることができるのである。

２）キャトル・グリッド（Cattle Grid）

キャトル・グリッドとは「家畜脱出防止溝《柵囲いの切れ目に設けてゲートの代用にする》」と研究社の『新英和大辞典（第六版）』に記載されている。キャトル・グリッドという言い方はイギリスでの言い方で、アメリカではキャトル・ガード（Cattle Guard）と言う。

キャトル・グリッドとは、道路に四角い溝を掘り、その上に金属棒を、ある程

写真７６

写真７７

度の間隔をあけて、何本も並べているものを言う。自動車はその上を通ることができるが、家畜が通ろうとすると、金属棒と金属棒の間に脚が入ってしまい、うまく通過できないのである。そのため、家畜はキャトル・グリッドの手前で、立ち往生してしまう。家畜の移動や逃亡を防ぐために設置されている設備である。

キャトル・グリッドは、遠くから見ては分からない。地面の溝の上に金属棒が横に設置されているため、近くにきて初めて分かる設備である。

写真７６にはゲートの扉はない。この道はロックへ通じている道である。自動車が通るために、キッスィング・ゲートなどは設置できない。１枚扉のゲートを設置してもよいのであろうが、自動車の交通量のことが一番大きな理由であろう。ロックの人たちや Thames Path のウォーカーも通るので、キャトル・グリッドが設置されているのであろう。家畜はここまで来て、このキャトル・グリッドの上を歩くことができないのが分かる。だから、キャトル・グリッドは、ブライドル・パス上には設置されていないのである。

このキャトル・グリッドは Thames Path 上に多くはなかったが、他の場所にも設置されているものがあった。写真７７は扉の付いているゲートも一緒に設置されているものである。扉は開けっ放しになっていた。

Ⅵ．壊れているもの、使われていないもの

上に述べたいろいろなゲートや設備も、すべての物の整備が完全に行われているわけではない。壊れたままのゲートもある。

例えば、写真７８である。これは１枚扉のゲートであるが、壊れている。

写真７９、写真８０、写真８１は扉を止めるための留め具が壊れているか、扉の留め金と、その留め金を受ける方の金具が一致しなくなっているのである。しかし、この写真のように、ひもや鎖などが掛けてある場合は、まだゲートとして使われているということが分かるのである。

使われていないゲートもある。写真８２は、１枚扉のゲートはあるのだが、本来その横にあるべき柵がないのである。昔は柵があったのであろう。

木製キッスィング・ゲートにも、このような例はある。写真８３の木製キッス

写真７８

写真７９

写真８０

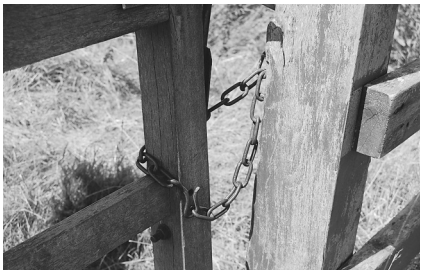

写真８１

ィング・ゲートは壊れているわけではない。しかし、やはり、このキッスィング・ゲートの横にあるべき柵がないのである。柵がなく、横を自由に通行できるのであれば、わざわざキッスィング・ゲートを通過する必要もない。

金属製キッスィング・ゲートで扉がないものがあった。写真８４である。この金属製キッスィング・ゲートの左右には頑丈な鉄柱が横になって設置されているので、扉がないだけの問題なのだか、家畜の移動を心配する必要がもはや無くなったのかもしれない。

スタイルにも現在は使用されていないものがあった。写真８５を見れば分かるが、植物が繁茂していて、人が通っている跡がない。このスタイルにも横にあるべき柵がなく、スタイルだけが取り残されているのである。

このように、Thames Path といってもすべての設置物が整備されているわけではない。そして、それぞれの設置物も、設置した目的を失えば、つまり、牧草地としてもはや使用されていないところでは、壊れてもそのまま放置されており、時代の変化に取り残されているようである。

写真８２

写真８３

写真８４

写真８５

Ⅶ. まとめ

Thames Path に設置されているゲートやスタイルなどを見てきたわけだが、これらの設置物は、テムズ川沿いにある土地の利用方法と関係があるものばかりである。そして、羊や牛馬が牧草地から勝手に外に出られないように設けられているゲートやスタイルなどは、家畜の移動防止だけの目的で設置されているのではなく、Thames Path のウォーカーが通行できるようにも考えられた物であることが分かる。

スタイルや、斜めになっている金属製のゲートの扉などを考えれば、それぞれの設置物は設置されている場所の地形をも考慮に入れ、それぞれの場所に適したものが作られていることが分かる。

これらの設置物を見ていくと、Thames Path のウォーカーのために設置されている物と、ウォーカー用というよりは乗馬を楽しんでいる人たちのブライドル・パス用の物や、自動車のために設置され、それをウォーカーも利用しているキャ

トル・グリッドのような設備もある。

ロンドンという大都市、郊外の住宅地、そして、牧草地や畑が広がっている田園地帯を通っている Thames Path には、そこに住んでいる人々、Thames Path のウォーカー、そして自然との共存共栄ということを考えて、さまざまな物が作られているのである。

そこに住んで生活している人々を排除するということではなく、逆にテムズ川沿いを歩きたいという人々の望みを排除することでもない。そういう極端なことではなく、住民や農場主の協力と、Thames Path ウォーカーの協力が一つになったところに、この小論で取り上げた設置物が置かれる理由があり、それが活用されているのである。

テムズ川沿いの Thames Path を楽しみながら歩くために、住民と一緒にウォーカーがあるということを、我々はもっと考え、見習うべき点が多くあるように思われてならない。

結局、Thames Path 上のゲートやスタイルなどは、その土地に住んでいる人々と、Thames Path を歩きたいという人々の考えが折り合った結果できた設備であり、テムズ川沿いの生活やその地区に適した設置物であることが分かるのである

以上

（この小論は、法政大学の 2007 年度在外研究により出来たものである）